

## 陳望道《修辞学發凡》第七編（下）

### 付録 霍四通「節縮等六種類の『言葉上の修辞技法』 の当代における研究の進展」

甲 斐 勝 二（人文学部教授）  
 間 ふさ子（人文学部教授）  
 宮 下 尚 子（共通教育研究センター講師）  
 張 璐（福岡大学非常勤講師）  
 王 毓 雯（福岡大学非常勤講師）  
 霍 四 通（復旦大学中文系副教授）

#### はじめに

以前より訳出中の陳望道の《修辞学發凡》の続きを掲載する。今回は第七篇の後半部分である。今回の翻訳は単語の修辞法の領域で、現代では語法に入るような部分もあり、また文全体で行われる比喻や言い替え等とも違い、そこに扱われる修辞法がうまく示されるように訳するのがなかなか難しい所なので、これまであまり使わなかった「訓読」の方法を便宜的に訳文に使ったところもある。漢字の上につけられたふりがなによる解釈が煩わしいと思うが、漢語に従う修辞法の例を伝えるための工夫として、この方法がもっとも簡便に思われた。ご寛恕を願うところである。訓読という方法は、日本人の漢語理解にとっては確かに良くできている。就いては、陳望道は先秦から当時まで、また文言から白話まで各種の文献から用例を引いているから、この修辞学で扱われる各種の古典文に現れる修辞法に対して、この伝統的な訓読法がどのような工夫で対応しているのかなど、明治以前の漢学者のつけた訓読や、現代なら『漢文体系』などに示される現代の中国文学研究者の示す訓読の様子を使って調べてみると何か分かりそうな気がしたが、或いは斯学では既にかなり研究が進んでいるのかも知れない。

今回も復旦大学の霍四通先生より、現代の修辞学研究の視点からの解説を送っていただいた。『修辞学發凡』訳文の後に付録として訳出しているのので、参考に願いたい。

なお、引用文の訳文は従来どおり既に翻訳のあるもの

はそれを参考にさせていただいたが、いちいち引用文に注をつけるのは煩わしいこと、また場合によっては引用の趣旨に従いささか文を変えざるを得ない所もでてくるので、今回から本編末に参考文献としてまとめておくことにした。参考にさせていただいた先生方にはお礼を申しあげると共にご海容を願いたい\*1。

#### 陳望道《修辞学發凡》第七編（下）訳文

##### 六 節縮

言葉を切り詰めて短くすること、それを節と呼び、言葉を縮めて合成すること、それを縮という。節も縮も共に音や形の上での工夫で、意味においては何の増減もない。例えば「五月四日青年節\*2」を切り詰めて短くして「五四」とし、三十を縮めて合成して卅と書き、五月三十日を節縮して「五卅」\*3と書くのがそれで、意味は同様に五月四日、三十、五月三十日で何の増減もない。読み音や字形は比較して短くなっているので、声に出しても書いてみても簡単になり、耳で聞いても目で見てもかなり簡潔になっているばかりである。意味に増減がないとはいうものの、繁雑さや冗長さは避けられ、日常よく使う言葉を切り詰めて簡略化して、簡略化できるところは簡略化しようと言う目的をしっかりとすものである。しかし、古文の場合はこれを用いて、対偶の音節に対応させたり或いは錯綜を作り出す。今、以下に比較的良好く使うものをざっと挙げよう。

\*1 今回の翻訳は、甲斐・間・宮下が下訳を作り、張璐・王毓雯が訳文を検討し、最終的に甲斐がまとめた。文責は甲斐が負う。

\*2 「五四青年節」：1919年に起きた五四運動を記念する日で青少年には半日の休暇が与えられる。

\*3 「五卅」：ここは五卅惨案を指すか。1925年5月30日に上海でおきた学生弾圧事件。死傷者が多数出た。

甲 縮合 (言葉を縮めて合成する)

(一) 「不可～ (～してはならない) を縮合して巨とすることがある。例えば『後漢書』 呂布伝に以下のようにある。

呂布は劉備を横目でみて、「大耳野郎は最も信じては巨い」と言った。

『説文解字』には、「巨<sup>\*4</sup>、不可の意味である」という。

(二) 「何不～ (なんで～しないのか)」を縮合して盍とすることがある。例えば『論語』 公冶長に以下のようにある。

孔子は「君たちの志というものを盍<sup>なぜい</sup>言いのか」とおっしゃった。

『朱子注』には、「盍、何不の意味である」という。

(三) 「奈何 (どうするのか)」は縮合して「那」とすることがある。例えば『左伝』 宣公二年に以下のようにある。

牛に皮があり 雌雄の犀もまだいるとしても 甲を捨てては那<sup>どうされるの</sup>か

顧炎武の『日知録』(三十二)には、「続けて発音すれば那、ゆっくり発音すると奈何で、同じ意味である。」といている。

(四) 「之于」或いは「之乎」<sup>\*5</sup>は縮合して「諸 (これ)」とすることがある。例えば『列子』 湯問に以下のようにある。

渤海の辺に諸 (掘り出した土) を捨てる

馬建忠『文通』では、「之」と「于」を合わせて、早く発音すると「諸」だ、という。『揚子法言』 先知には以下のようにある。

過去の聖人の法によって将来を治めること、それは喩えれば琴柱を固定したまま瑟の音調を調整するようなものだ。諸<sup>これ</sup>あるか。

これは、王引之の『経伝釈詞』に、「諸、之乎にほかならない。素早く発音すると諸となり、ゆっくり発音すると之乎となる」、という例である。

(五) 「不要」は縮合して別 (～するのをやめよ) とすることがある。例えば『紅樓夢』 第四十回に以下のようにある。

林黛玉は、「私は李義山の詩が一番嫌いですけれども、「蓮の枯れ葉を残しおき雨の降る音を聴かん」の一句だけは好きです。皆さんときたら蓮の枯れ葉を残そうとしないのですね」といった。宝玉は「たしかにいい句だね。次からは抜くのは別い<sup>させな</sup>ことしよう。」

(六) 「勿曾 (～したことがない)」は縮合されて「罍<sup>\*6</sup>」となるときがある。例えば『呉歌甲集』<sup>\*7</sup>には以下のようにある。

父さんにご飯を食べさせてもらい  
母さんに着物を着せてもらっても  
兄さんの所の米は食べた罍<sup>ことはな</sup>いし  
兄嫁の花嫁衣装は着た罍<sup>ことはな</sup>い

このほかに「不用」を「甬」に縮めたり、「勿要」を「嫫」に縮めたり、「二十」を「廿」に縮めたり、四十を「卅」に縮めるなども、たいへんよく使われる。このような合成文字の音声は、通常は縮められた文字の合成音になる。例えば、「罍」の音は「粉」、「卅」の音は「撒」で、「卅」の音は「錫」である。音声が変わってしまった場合には、縮めた文字の合成音にはならない。例えば「廿」は現在は「念」のように読む。兪樾の『茶香室叢鈔』(九)に、「廿の音は「聶」だが、音が変わって「念」になった。それは「捻」の音に「聶」があるようなものだ」と言っている。すべて合成音は、縮める文字を素早く発音したり素早く読むときにできあがるものである。

乙 節短 (言葉を切り詰めて短くする)

節短は通常は素早く発音したり読んだ結果である。兪樾の『古書疑義挙例』 語急例に、「古人は言葉が素早い。従って「如」を「不如」と言う意味で用いることもある。隠公元年『公羊伝』に、「如勿与而已矣 (与えないほうがよい)」とあり、その注に、「如は不如に他ならず」というのがその例だ。「敢」を「不敢」とする場合もある。莊公二十二年『左伝』に「敢辱高位 (高位をかたじけなくできるものではない)」とあり、その注に「敢、不敢である」と言うのがその例である。これはつまり、「如」は「不如」の節短、「敢」は「不敢」の節短で、節短された理由は、素早く発音されたからである。古来節短の例は多いのだが、その中にあるものは素早く発音されて短くなったものばかりではない。しばしば見るものとして、書名の節短がある。例えば以下の通り。

(一) 摯虞の『文章流別論』、李充の『翰林論』を、『流別』、『翰林』と呼ぶ場合がある。

『文心雕龍』序志篇では以下のように言う。

仲洽 (摯虞) の『流別』、宏范 (李充) の『翰林』は、それぞれ細部について明らかにはするが、本筋はあまり見ていない。

書名を篇名まで入れて節短するものもある。

(二) 『呂氏春秋』の中には六『論』、八『覽』、十二『紀』、

\*4 巨:上海教育出版社版では、この「巨」を「巨」に作る。おそらくは校正ミス。旧版および復旦大学出版社『修辞学発凡』は「巨」に作る。なお許慎『説文解字』にこの字は本来はなく、宋代の徐鉉による新附字として掲載。

\*5 「之于」「之乎」の「之」は代名詞で動詞の目的語としてここでは使われ、「于」「乎」はその後ろにそれが施される場所や人物が来る。以下の『列子』の引用文「投諸渤海之尾」は「諸」を「之于」に戻して訓読すると「之を渤海の尾に(于)投ぐ」となる。

\*6 罍: fēn 方言。「未曾」「不曾」の意味(『漢語大字典』四川辞書出版社/湖北辞書出版社)

\*7 『呉歌甲集』:顧頡剛の編集らしいが詳細は不明。

が含まれるが、縮めて『呂覽』と呼ぶときがある。「太史公自序」及び「報任少卿書」に以下のように言う。

呂不韋は蜀に遷されて、世には『呂覽』が伝えられることになった。

篇名の略称では「学而」、「述而」の類などさらによく見かけるので、例を挙げる必要もないだろう。また地名にも節短がある。例えば、

（三）渤海の碣石を渤海と切り詰めるときがある。『史記』貨殖列伝に以下のように言う。

燕という所もまた、渤海のあたりにある人の多く集まる都である。

その注に「渤海碣石」と云う\*8。

（四）郡の宕渠県を巴宕と切り詰めることがある。『漢書』王莽伝に以下のようにある。

（皇帝となる）命運は巴蜀の宕渠県で完成した。

注に「巴郡宕渠県」とある\*9。これは現在江蘇と浙江を合わせて江浙と切り詰めたり、浙江義烏県を浙義とするものと全く同じである。さらに官職名の切り詰めもある。例えば、

（五）黄門侍郎、散騎常侍はしばしば切り詰めて黄散とする。『晋書』陳寿伝に以下のようにある。

杜預がそのいさかきを静めようと、再度帝に、（陳寿を）黄散の職に就けるのがよいと推薦した。

（六）中書、秘書はしばしば切り詰めて中秘とする。『魏書』礼志に以下のようにある。

議論の重大さは、歴史上に残るほどのことです。中密の学者たちを集めて、それぞれに意見を述べさせるべきです。

これは現在でも似たような例がある。このほかに年号の節短がある。例えば宋の神宗の年号である熙寧、元豊を熙豊とし、宋の徽宗の年号である政和と宣和を政宣といった類いである。これは非難されたものだが\*10、その理由は、「恭しさに欠ける」との理由だった（『日知録』二十）。人名となると節短はさらに多くなり、排斥者も多くなって、節短方式上意見が最も分かれるところである。まずは姓の切り詰めと、名の切り詰め二つの項目に分けて例を挙げよう。姓を切り詰めるものとしては、以下のようなものがある。

（七）韓愈「読東方朔雜事」詩では東方朔を方朔と切り詰めている。

方朔は結局は子供で、はしゃぎまわって抑制がきかない。

この詩の中には方朔が三回出てくる。また、

（八）劉知幾『史通』六家篇では司馬遷を切り詰めて馬遷としている。

馬遷は『史記』を撰じ、彼当時の皇帝の時代まで達

して終わった。

この篇の中には馬遷が何回もでてくる。また、

（九）『晋書』諸葛恢伝では諸葛を葛に切り詰めている。その伝には荀闡、蔡謨と諸葛恢を載せているが、共に字は道明といたので、人々はそのためにこういった。

京都の三明はそれぞれ名が高く、蔡氏は儒雅で荀・葛は清たることで知られる。

『晋書』の中では諸葛の略称も何度も現れる。例えば王潜伝の中で諸葛亮を葛亮と切り詰めているのがその例である。名前を切り詰める例となると一層多くなる。比較的良好に知られているものを挙げるだけでも以下のようなものがある。

（十）王勃「滕王閣序」では楊得意を切り詰めて楊意にし、鍾子期を鍾期とするところがある。

楊意に出会わねば司馬相如はその「大人の賦」を自分の手元においたままになっていたし、鍾期は自分を知る人に出会って、安心して「流水」の曲を演奏する事ができた。

（十一）嵇康「琴賦」では榮啓期を榮期に切り詰め、王昭君を王昭としている。

そこで遁世の人は、榮期・綺季などの類いでは、共に高い山に登り、深い谷を越え、みごとな枝を支えに、険しい崖をわたって、その山麓の下を遊行する。……下流の俗謡になると「蔡氏五曲」「王昭楚妃」「千里別鶴」など、閑を持って余したり手頃なものがないときにもちいる歌のようなものなどにも、見るべきものはある。

などなどである。これは概ね『左伝』定公四年に晋侯重耳を晋重と呼び、昭公元年でも莒展興を莒展と切り詰めたことがあり、名の切り詰めにはつとに先例があったので、例に従った切り詰め呼称がとりわけ多いのである。

姓や名を切り詰めるのは、通常簡便にするためであって、各種詳しく挙げる必要のない場合に用いる。例えば例の（九）は、当時の人々は皆知っていたし、例（七）は、題目の中にもう挙げられている。例（八）はその文章の上下の文から推測できる。しかし、時には文字表現上や音節配列上の工夫もある。或いは錯綜させるために切り詰める場合もある。例えば『史記』陳杞世家では以下のようにある。

靈公とその大夫の孔寧儀と行父は共に夏姫に通じていた。……靈公と二人は夏氏のところで酒盛りをした。靈公は二人をからかって「微舒はお前に似ているな」と言った。二人は「あなた様にも似ていますな」と言った。微舒は怒った。靈公が酒をやめて出てくるのを、微舒は厩の入り口に弩弓をもって伏し隠れ、靈公を射殺した。孔寧儀と行父は共に楚に逃

\*8 正義に「渤海、碣石は西北にあり」とある。

\*9 「王莽伝」中の晋灼の注

\*10 顧炎武『日知録』二十「割並年号」の部分。



げた。靈公の太子午は晋に逃げた。微舒は自立して陳侯となった。微舒は本来陳の大夫だったからである。夏姫は御叔の妻で、舒の母である。成公元年冬、楚の莊王は夏微舒のために靈公を殺し、諸侯を率いて陳を伐った。陳に向かって言う、「驚くな、私は微舒を退治するだけだ。」

文中では夏微舒、微舒、舒の名を混ぜ合わせて使っている。幾つかの場所で別の説明がつけられるものを除いて、例えば「舒の母である」と一字だけ用いながら、その直前の句では「微舒はもとは陳の大夫だった」と言って微舒の二字を用いているような場合は、錯綜表現のために切り詰めたと言うほかはない<sup>\*11</sup>。

また、『史記』司馬穰苴列伝には以下のようにある。

司馬穰苴は、田完の末裔である。齊の景公の時、晋が阿・甄を征伐し、燕は河上に侵入したが、齊の軍隊は防衛に失敗した。景公はこれを心配していた。晏嬰はそこで田穰苴を推薦して言った、「穰苴は田氏の傍系ですが、その学識は人々を従わせ、軍事では敵を威圧できます。どうかお試してください。」景公は穰苴を召し、軍事について話し合ったところ、大いにその人物を気に入り、將軍にして、兵を使って燕と晋の軍隊に当たさせた。……晋の軍隊はこれを聞くと、軍事行動を止めて戻っていった。燕の軍隊はこれを聞くと、河をわたって散り散りになった。そこで追い打ちをかけ、ついに失っていた以前からの領土を取り戻し、兵を引き上げて戻った。国に戻る前に、兵団を解散し、束縛をとき、誓いを立ててから都城に入った。景公と大夫たちは外まで出迎え、しきたり通り軍隊をねぎらい、その後宗廟へと戻った。穰苴にまみえると、尊んで大司馬の地位に就けた。田氏は日増しに齊国で尊重されたが、しばらくすると大夫の鮑氏、高、国の連中が彼に嫉妬し、景公にこっそり悪口を告げた。景公は穰苴を遠ざけたので、苴は憤りのあまり死んでしまった。田乞、田豹などはこのため高や国などを恨んだ。その後田常が簡公を殺害し、高や国の一族をことごとく滅ぼしてしまった。常の曾孫である和になると、自立して齊の威王となったので、軍隊の用い方や威厳の振るい方に穰苴の方法を大に行ったため、諸侯はみな齊に挨拶にやってきた。

文中では司馬穰苴、田穰苴、穰苴、苴の語が錯綜して用いられているが、幾つかの所で別の解説がつけられるのを除けば、例えば「苴は病を發して死んでしまった」では苴の一字を使うだけなのに、直前の一文では「景公は穰苴を遠ざけた」といって穰苴の二字を使っているよう

なもの、錯綜を作るために切り詰めたというしかない<sup>\*12</sup>。対偶の音節に合わせるために切り詰めるものに到っては、例は一層多くなる。例えば陸機「辨亡論」にある文の例を見よう。『晋書』陸機伝ではこう書いている。

施績、范慎は威嚴の重さで人々に知られ、丁奉、鍾離斐は武力の強さで称えられた

一方『文選』に掲載されたものでは、

施績、范慎は威嚴の重さで人々に知られ、丁奉、離斐は武力の強さで称えられた

と書いてあり、丁奉、離斐と施績、范慎を対にしている。これは名を切り詰めて音節を対にする一つの極端な例である。錢大昕『十駕齋養新録』（十二）ではこう言っている。「漢魏以降、文は駢儷を重んじ、詩では声律に厳しくなった。引用する古人の姓名も、勝手に切ったり省いたりしているが、当時は悪いとは考えていない。例えば皇甫謐「釈勸」には「榮期は三樂でもって尼父を感激させた」とあり、庾信の詩には「丘明のみが恥とし、榮期を楽しませることはなかった」とあり、白樂天の詩には「天は榮期に樂を教え、人は接輿に狂人である事を許した」とあるが、これらは皆榮啓期のことを言っているのである。「費鳳別碑」には、司馬は藺相を慕い、南容は白圭に復す、とある。藺相如のことを言っているのである……」。『十駕齋養新録』が既に挙げている例だけでも、数十の例がある。名前を切り詰めて対文に合わせるというこのような傾向は、内容上の必要性から文字を切り離し、形式上の手段としてのみ使ってしまう事になりやすい。内容上から切り詰めてよいのかどうかについての考慮をせず、形式上の必要ばかりが考えてしまうのである。かくして内容は注釈がなくては理解できないほど、時には作者しか注釈ができないほど晦渋になることが起こる。こうなると、以前の文人がもっとも容易にやりがちだった「足を削って鞋に合わせる」という愚かな失敗をしてしまうことになり、批判を受けるのも当然となる。過去にもっとも厳しくこれを批判した者に顧炎武を挙げられよう。顧炎武は名前の切り詰めに「通じるものか」とははっきり罵っている（『日知録』二十三）。しかし顧炎武はその是非をはっきりとは言っていないし、その成否もはっきりとは述べていない。他の批評者もこんなものである。従って、なかなか人々を納得させられないために、切り詰めに擁護する人を引き合いに出して、彼らを浅はかで知恵のないものと罵ることになってしまう（俞正燮『癸巳存稿』十二）。かくしてこの問題はずっとこのように「通じる通じない」とか「浅はかだ」とかの罵り声のなかでほおっておかれ、ずっと実際の状況にぴたりした解決がなされることはなかった。

切り詰め形式の遊戯性を批判するのは正しいと考える

<sup>\*11</sup> 錯綜：修辞法の一つで、わざと表現に差を与えるもの。

<sup>\*12</sup> 以上の部分、同様の文例が同様の解説表現をとって現れており重複が見られる。旧版には司馬穰苴列伝の部分はなく、あるいは差し替え分を間違えてともに掲載されてしまったのではないかと疑う。

のだが、批判も形式ばかりに注意して実際の内容に注意しないようではまずい。なぜならば、批判すべきなのは切り詰め自身ではなく、切り詰めの濫用だからである。切り詰めを用いて良いかどうかは、文脈による事、内容に依ることなのだ。もう少し明快に言えば、切り詰めを用いることができるかということ、および切り詰めてしまった場合でも意味が読み取れるか、あるいはそれでさらに簡潔さをまし力強くなるかどうかは、内容次第なのである。もし、切り詰めの形式というだけですぐに批判するようでは、切り詰めの形式をもてあそぶのと同様形式主義の陥穽に落ち込んでしまい、切り詰めというものに文脈や内容と関連する認識をもつはずもないし、そこからは文脈や内容とを関係させた運用も起こるはずはない。

切り詰めというこの形式は、今では用途は広く、明快で際立つものとし、簡潔で力強いものとなる例がたくさんある。例えば「馬克思列寧主義（マルクスレーニン主義）」は「馬列主義」に、「土地改良」は「土改」に、「人民代表大会」は「人大」に、「政治協商會議」は「政協」に、「北京」と「天津」を一緒にして「京津」としばしば書く等がそうである<sup>\*13</sup>。

## 七 省略

話の中で省略できる語句を省略してしまったものを、省略表現と呼ぶ。それには積極的な省略と消極的な省略の二種がある。省略できる者はあっさり省略してしまえるもの、例えば絵画における省略法（略写法）、或いは書いても一二語で終わらせてしまうばかりのもの、例えば唐彪の言う「省筆」<sup>\*14</sup>など、これが積極的な省略である。あっさり省略して全く書かないという前者の例として、『左伝』『穀梁伝』『国語』『礼記』『史記』『説苑』等に載せられる驪姫が晋の献公に太子の申生をこっそり誣告する事件を例に挙げ、それらを比べて参考にしてみよう。

（『左伝』）姫が太子に言った、「君主は齊姜様を夢見られました、すぐに祭礼を行わねばなりません。」太子は曲沃で祭礼を行い、戻って公に宗廟へのお供え物を送った。公は狩に出ており、姫がこれを宗廟に置いておいた。六日たち公が来ると、毒を混ぜて献上した。公がこれで地を祭ると土が盛り上がった。犬に与えると、犬が倒れて死んでしまった、下級の臣下に与えると、下級の臣下も倒れて死んでしまった。姫は泣いて言った、「犯人は太子に違いありません。」太子は新城（曲沃）に逃げた。公はそのお守り役の杜原款を殺した。或ものが言う、「あなたがちゃんと申しあげれば、君主はきっとよく分かる

はずです。」太子は言う、「君主は姫が近くにいないければ、行動もうまくいかず、食事もう喉を通らない。私が申しあげれば、姫はきっと罰せられる。君主はもう歳ではないか、私とて嬉しいものではない。」或ものは言う、「それなら逃げだしますか。」太子は言う「君主がその罪について実は分かっていない、この汚名を着せられたまま国外に出ても、誰も受け入れてくれる人はいないだろう。」（僖公四年）

（『穀梁伝』）麗姫がまた（君主に）言う、「私は夜、夫人が急ぎ足でやってきて「お腹が空いてたまらない」という夢を見ました。お世継ぎ様の宮殿がすでに完成しましたので、お祭りをされたら如何でしょうか。」そこで献公は世継ぎに、「祭るように」といった。世継ぎは祭った。祭り終わると、祭祀に用いた食物を君主に届けたが、君主は狩に出ていかなかった。麗姫は毒酒を酒にして、肉に毒を塗った。献公が狩から戻ると、麗姫は言う、「お世継ぎ様が既にお祭りを終えましたので、君主様にお供え物を届けられました。」君主が食べようとすると、麗姫は跪いて言った、「外部から来た食物は、確認する必要があります。」酒を地面にかけると地面が盛り上がり、乾し肉を犬に与えると、犬は死んだ。麗姫は部屋から出て声を上げて泣き言った、「天よ、天よ、この国はあなた様の国なのに、あなた様は君主になるのをなぜお待ちになれませんか。」君主はため息をついて言った、「私はお前に厳しすぎたことではないのに、なんとひどいことをするのだ。」使いを出して世継ぎに言った、「今後のことをよく考えよ。」世継ぎの守り役里克が世継ぎに言った、「宮殿に出向きご自分で弁明なさい、行って自分で弁明すれば生き延びることができるでしょう、行って弁明しなければ生き延びることはできません。」世継ぎが言う、「わが君主はもうお歳である。既に毫碌されている。私が出向いて自ら弁明すれば、麗姫が死ぬことになろう。麗姫が死ねば、わが君主が不安になるだろう。わが君主を不安にさせるものなら、私は自殺したほうがまだ。私は自殺して君主を安心させたい。」（僖公十年）

（『国語』）麗姫は君命をつかって申生に命じて言った、「今夕に君主様は齊姜を夢見られた、速やかにお祭りしその供え物を分け与えよ。」申生は了承した。そこで曲沃にて祭りし、絳の地にて供え物の肉を分けた。公は狩に出ていたので、麗姫は分けた肉を受け取り、酒に鳩の毒を入れ、肉には堇の毒を

<sup>13</sup> このような表現は現在各所で見られ、『現代漢語縮略語辞典』（語文出版社2002）というものも出版されている。

<sup>14</sup> 唐彪「省筆」：唐彪は清代浙江の人、生卒年未詳。「省筆」はその著『讀書作文譜』の「文章諸方」篇の中の一文。

塗った。公がやってくると、申生を呼び出し献上させた。公がこれを使って地を祭ると地が盛り上がった。申生は恐怖を覚えて出て行った。麗姫が犬に与えると、犬は死んだ。下っ端の役人に酒を飲ませるとこれもまた死んだ。公は杜原款を殺害した。申生は新城へと逃げ出した。……ある人が申生に言った、「あなたに罪はないのになぜ行かないのか。」申生は答えていった、「できないことだ。出かけて行って罪が許されれば、その罪は君主に来るだろう、これでは君主を責めることになる、父親の悪行を明らかにすれば、諸侯からの笑いものだ、どこにも行くこともできなくなる。内では父母を困惑させ、外では諸侯を困惑させる、これでは困惑が重なるばかりだ。君主を捨てて罪から逃げようというのは、死にたくないということだ。私はこう聞いている、仁者は君主を責めず、智者はあちこちを困窮させない、勇者は死からは逃げないものだ。もし、罪が許されないのなら、行っても罪を重ねるだけだ。行って罪を重ねるようでは智者とはいえない、死ぬことから逃げて君主を責めるのは、仁者とは言えない、罪を得て死なないのは、勇者ではない。行けば責めがひどくなるばかりだ。悪事は重ねてはならず、死罪も避けてはならない、私は君命を待つとしよう。」(『晋語』二)

(『礼記』) 晋の献公はその世継ぎの申生を殺そうとした。公の子供の重耳(申生の異母兄弟)が彼に言った、「あなたはあなたのお気持ちを公に伝えないのか」世継ぎは言った「できない、君主は麗姫がいるので安心して居るのだ、この話をすれば公の心を傷つけるだろう。」「だとすればなぜ逃げないのか」というと、世継ぎは「できない。君主は私が君主を殺害しようと思っているのだ。天下には父親がいない国など有りはしない。私はどこへ逃げろというのか。」(『檀弓』上)

(『史記』) 麗姫は太子に言った、「君主は夢で齊姜をご覧になった。太子は速やかに曲沃でお祭りをして、お供え物を君主に持ってくるように。」太子はそこでその母の齊姜を曲沃でお祭りし、そのお供えの肉を献公に献上した。献公はその時狩りに出たので、肉は宮中においた。麗姫は人を使って毒薬を肉の中に入れた。翌日献公が狩りから戻ると、料理人が肉を公に献上し、献公はこれを食べようとした。麗姫が傍らから止めて言った。「お供えの肉は遠方から来たものです、確認すべきです。」地を祭ると、地が盛り上がり、犬に与えると犬は死に、下っ端役人に与えると、下っ端役人は死んでしまった。麗姫は泣いて言う、「太子はなんとむごい人でしょう、自分

の父なのに殺害して取って代わろうだなんて、他の人にはもっとひどいことをするでしょう。しかも、君主は年老的、もう先も短いのに、待ちきれないばかりか、殺害しようとするなんて。」太子はこれを聞くと新城へと逃げた。献公は怒り、その守り役の杜原款を成敗した。或ものが太子に言う、「この薬を仕組んだのは麗姫である、太子はどうして自ら釈明されないのか。」太子は言う、吾が君主はもう高齢である。麗姫がいなければ、安心して眠れず、食事が進まない。たとえ弁明しても、君主は怒るだけだろう。だめだ。」或ものが太子に言う、「他国に亡命されよ。」太子は言う、「この悪い噂が広まれば、誰が私を受け入れてくれよう。私は自殺するしかない。」(『晋世家』)

(『説苑』) 晋麗姫が太子の申生を献公に密かに讒すると、献公は申生を殺そうとした。公子の重耳が申生に言う、「これはあなたの罪ではない、あなたはどのように出向いて行って弁明されないのか。弁明すれば必ずや罪を逃れられるだろうに。」申生は言う、「だめだ。私が弁明すれば、麗姫が必ず罰せられる。吾が君主はもう高齢だ、麗姫がいなければ安心して眠れず、食事が進まない。どうして吾が君主を不快なままに終わらせられようか。」重耳は言う、「弁明されないなら、さっさと逃げる方がよい。」申生は言う、「だめだ、逃げて生き延びることは、吾が君主を責めることになる。父の過ちを明らかにして諸侯に笑われれば、いったい誰が私を受け入れてくれよう。内には親孝行ができず、外に出てもうまく逃亡できるわけではない。これは重ねて私を苦しめるものである。私は聞いている、忠ある人は君主に刃向かず、智ある人は苦しみを重ねない、勇あるものは死から逃げない。かくなる上は私はこの身を当てるしかない。」(『立節』)

引用文中麗姫が献公にお供えの肉を差しあげる一節を、『左伝』は全く書いていないのは、この一連の話の中での省略法である。その他のものでも書いてある部分や書いていない部分があるのは、同様にこの話の中での省略法である。先に挙げた例の後者、つまり一二語に略にして示すものとなると、初めの方を先のように省略して書くことはできず、初めの文でそれ以上は詳しく述べられないほど詳しく述べておく場合がしばしば見受けられる。これがつまり呉曾祺のいう「上文にでているものは、一二語で略してのべる」という省略法である(『涵芬楼文談』省文)。ここには「省文と省句の違いがある、例えば『その他はこれに倣う』、『他は類推すること』、などは省文法である。『舜はまた禹に命令した』、『河東の凶作はまた同様である』の類いが、省句法である。」(唐



彪『讀書作文譜』卷七)

以上述べた積極的省略法は、ともに文を省略する方法である。文の省略が極まると、書かない、ということになる。これが前者である。省略がそこまで到らずに、書いていないわけではないが、略して書かれているのが後者である。これに対して消極的な省略は、文を省略するのではなく、単語を省略するものである。単語を省略する消極的省略法もまた二つに分かれる。

甲 上文を受けた省略—上文にある単語を、下文では省略してしまうもの

(一) たくさん聞いてその善いものを選んでそれに従い、たくさん見て（その善いものを選んで）それを覚える。（『論語』述而）

(二) 君主は大夫に対しては、三度その病気について尋ね、その葬儀には三回参加する。士に対しては、（君主は）一度尋ね、一度参加する。（『荀子』大略）

(三) もし死ぬのなら、私はあなたたちと共に死に、生きるときは、共に生きる。（『水滸伝』第二回）

(四) 敗走中の楚人が食事をしていると、追撃する呉人が追いついた。（楚人は）逃げ、（呉人は楚人の作った食事を）食べてから追いかけた。（『左伝』定公四年）

(五) 私は私の道を行く、君は君のだ。（『冬夜』風の話）

これはみな上文に出ているので、下文ではみな省略したものだ。

乙 下文で分かる省略—これは先の者とは逆で、前後に出てくる言葉を上文には出さずに上文でまず省略してしまうもの。例えば以下の通り。

(六) 七月（コオロギ）野に在り、八月（コオロギ）軒の下に在り、九月（コオロギ）戸口に在り、十月コオロギは私のベッドの下に入りこむ。（『詩経』豳風「七月」）

(七) 夏后氏の時代は五十（畝）で税を納め、殷人の場合は七十（畝）で税を納め、周人の場合は、百畝で税を納めさせた。（『孟子』滕文公上）

(八) 渠勒国……東は戎盧（に接し）、西は婁羌（に接し）、北は扞彌に接す。（『漢書』西域伝）

(九) この南京は……内城は十三（里）、外城は十八（里）、穿城が四十里、沿城ぐるりと回って一百二十余里である。（『儒林外史』第二十四回）

この二組の省略法を比べれば、当然ながら前者のグループが比較的一般的で、後者のグループはあまり見られない。従って、後者のグループは文章制作に深い理解を持っていないととてもできないと考える者もいる。例えば張文潜は言う、「『詩経』三百篇……文章制作に深い理解のないものでは作れるものではない。例えば「七月野に在り」から「我がベットのの下に入る」まででは、「七月」

以下ではずっとなにもいわず、「十月」になってようやくそれが「コオロギ」であるという。文章制作に深い理解のないものにはできることだろうか。」（胡仔『荅溪漁隱叢話』前集卷一所引）

## 八 警策

ことばが簡潔にして奇であり含むところの意味が深く人を感動させるものを名付けて警策表現といい、また警句とよぶ。それを用いてミツバチの如く姿形は小さいが刺があり蜜があるものが、最も見事なものとされる。文中に警策表現があると、これによって文章の氣勢が上がるのがよくある。

警策辞はおよそ三種に分けることができる。

一つ目は明らかなことがらを極めて簡単に表現することで、一種の格言的な味わいを感じさせるものである。例えば、

(一) 事実は事実だ。（魯迅訳『日本現代小説集』幼き者へ）

(二) 鞭は長くとも、馬の腹にまでは届かない。（『左傳』宣公十五年）

(三) 以前のことを忘れないこと、後の行為の師匠である。（『史記』秦始皇本紀）

二つ目は、表面上は何の関係もないような二つの事柄を一文にまとめあげていて、初め見たときにはよくわからないが、その中に実は真理を含んでいるものである。例えば次のようなもの。

(四) 欠点のある戦士でも結局のところ戦士なのであり、完璧な蒼蠅も結局のところは蒼蠅にすぎないのである。（魯迅「戦士と蒼蠅」）

(五) 壁に耳有り、伏兵は傍らにあり。（『管子』君臣）

(六) 尺には足りず、寸には余る。（『史記』白起王翦列傳贊）

三つ目は、表向きは矛盾し奇妙なのだが意味はやはり一貫して筋が通っているもので、「奇説」や「妙語」(paradox) と呼びうる警策表現である。これは警策辞の中で最も変わっていて、また最も精彩のある形式である。例は以下のようなものである。

(七) 泳ぎのうまいものは溺れ、乗馬がうまいものは落馬する。（『文子』符言）

(八) 塞がねば流れず、止めねば進まない。（『韓愈』原道）

(九) 剛直なものは欠けやすく、潔白なものは汚れやすい。（『後漢書』黄琮列傳「李固与黄琮书」）

## 九 折繞

話を直截にいわずに、わざと曲がりくねって話し、ま

どろっこしいもの、これを折繞表現という。この類の表現を用いる目的は、およそ以下の四種がある。

### 一、言葉に婉曲さを求める

(一) 「小栓のおとうちゃん、これからいくのかい」一人の老女の声である。……「うん。」老栓は耳をすませながら返事をし、服のボタンをかけた。手をのばして言った。「こっちにくれ。」(魯迅『呐喊』葉)ここで呼ぶ「小栓のお父ちゃん」とはつまり華おばさんが自分の夫である老栓を呼んだものである。

(二) これは私たちがすでに何度も聞いて耳にタコができた議論だ(魯迅「勢所必至、理有固然」)所謂「耳にタコができた議論」とはすなわち既に聞き飽きた議論ということを言う。

(三) (呉王夫差は伍子胥に死を賜った。子胥は)いまにも死なんとするとき、つぎのように言った。「吾が墓に櫓を樹えよ、櫓が材木として使える頃、呉は滅びるであろうよ。」(『左伝』哀公十一年)所謂「櫓が材木として使える頃、呉は滅びるであろうよ」とは、呉が遠からず滅びることを言うのである。

### 二、諷刺のための諧謔

(四) (孔)子は太廟に入ると、何事にも問いかけた。或人は「鄆人の子の礼を知ると言ったのは誰か。太廟に入ってからは事ごとに質問しているではないか」と言った。(『論語』八佾)

注で言う。「孔子は若い時より礼を知っていることで有名だった、だからこの点で彼をそしったのである」。ここに言う「鄆人の子」というのは、現在でいうところの「なんとか様」というのと同じような言い方である。

(五) 漢の揚雄が変わった字を好んだのは、このくせがあったからだ。劉歆が彼の『方言』の原稿を借りようとすると、彼はほとんど黄浦江に飛び込まんばかりだった。(魯迅『門外文談』)

ここに「黄浦江に飛び込む」というのは自殺のことを言うのである。

(六) 扛喪鬼は見るや、驚いて顔は土気色になりあわてて「こちらはどこの亡霊さんで? どうしてまた? 一体誰にたたき殺されましたんです?」とたずねた。状況を知るものが言った。「こいつは前の村の催命鬼の悪友で、破面鬼というんだ。ちょうど酒をたかって三分ほど酔っぱらって劇場で勇武を輝かして威勢をしめし、あちらこちらめちゃうちゃにぶつかり回りどなりちらしていると、思いがけずも荒山の黒漆大頭鬼にぶつかった。硬いもの同士、どちらも譲らず互いに引かないままけんかが始まった。可笑しいのは、この破面鬼の金剛様のような容貌や仏様のような体格の良さも役には立たず、力持ちで武芸好きと聞いていたが、この黒漆大頭鬼にぶつか

るや、ろくに手も足も出せないまま、やっぱり地面に倒されて、拳法を使おうにももはやどうにもならなかったってことだ。」(『何典』巻二)

いわゆる「地面に倒されて、拳法を使おうにももはやどうにもならなかった」というのは死んだことを表す。

### 三、語意を増強するため

(七) 心理上の事物や意識などは物質(即ち物理的な物質)が生み出す最高の物であり、人間の脳と呼ばれるこの特別複雑な物質の機能なのである。(『レーニン全集』第十四巻第238頁)

ここで「人間の脳と呼ばれる特別複雑な物質」の機能と言われるもの、それはつまり、「人間の脳」の機能のことである。

(八) 杞子が鄭から使者を立てて秦に知らせ、「鄭人が私に鄭の北門の管理を任せています。もしこっそりと軍をすすめておいでになれば国を手に入れることができます」と告げた。穆公は蹇叔を訪ねた。蹇叔は「軍を疲れさせて遠方を襲うとは聞いたことはありません。……」と言う。穆公は別れを告げると、孟明、西乞、白乙を召して軍を東門の外に集めた。蹇叔はこれを哭いて言った。「孟子よ、私は軍が出るのを見ても、帰ってくるのを見ることはあるまい。」と泣いて言った。穆公は蹇叔に使いを出し告げさせた。「お前に何が分かる。普通の寿命ならば、お前の墓の木は両手で囲むほどの大きさになっているのに!」(『左伝』僖公三十二年)

ここに言う「お前に何が分かる。普通の寿命であれば、お前の墓の木は両手で囲むほどの大きさになっているのに」というのは、蹇叔が老いぼれていることを言っている。

(九) あの焦大が賈蓉なんぞを眼中に置くでしょうか。逆に食ってかかり、賈蓉の後を追いかけて言います。「蓉の若様、あなたさまはこの焦大を前にして主人風を吹かせるのはお止めなさい! そんなふうにするものではありません。あなたのお父様、おじい様でもこの焦大に腰を反らせて威張るようなことはなさりません。焦大ひとりいなかったら、あなたがたお役人が栄華富貴を楽しめるどころじゃないんですよ! ご先祖様が九死に一生を得られたからこそこの家業も支えられたというもの、それを今になって、私の恩に報いないばかりか、私に主人面しようとなさる。もう言わないというなら結構ですが、まだ言うならば、私たちは血を流すことになりますよ。」(『紅樓夢』第七回)

ここで「血を流すことになる」というのは、彼と命がけの争いになるであろうことを言う。



#### 四、表現を飾るため

(十)窓の外には花も草もなく、星月がきらめくころ、私はちょうど蚊と戦っていたが、その後また眠ってしまった。朝起きると、三名の戦勝者が真っ赤な腹を抱えて蚊帳の上に立っているのがみえた。自分の身体にはいくらかのかゆみがあって、掻きながら数えてみると、合わせて五つの喰われた痕があった、これは私が生物界での戦いに負けたしるしである。(魯迅「無題」)

ここでは「蚊をたたく」とは言わずに「蚊と戦う」と言い、「三匹の蚊が腹一杯に血を吸って蚊帳に身を潜めている」と言わずに、「三名の戦勝者が真っ赤な腹を抱えて蚊帳の上に立っている」と言っている。

(十一)「絵に描いた餅」がつまり我々の午餐である。(曹靖華訳『白茶』)

つまり昼食はありませんということである。

(十二)これは科学上の物である。つまり、H<sub>2</sub>Oがレオミュール度80度に達して得られる。別名を一白茶ともいう。(曹靖華訳『白茶』)

つまり、「これは白湯だ」、ということである。

#### 十 転類

話をするときにある分類の単語を別の分類の単語に転用することを転類と言う。漢語は『馬氏文通』以来、一般に単語を九種類に分けている。つまり、(1)名詞、(2)代詞、(3)動詞、(4)形容詞、(5)副詞、(6)介詞、(7)接続詞、(8)助詞、(9)感嘆詞である。これは現在一般的に行われている分け方で、将来研究が進めば別の分類も出てくるかもしれないし、分類の基準も別のものが使われるかもしれない<sup>\*15</sup>。私は単語の組み立て機能に拠る分類が可能だと考えるが、ここでは詳述しない。ただ断言できるのは、単語は分類できるし、必ず分類しなければならず、ある単語はこの分類あるいはこれこれの分類に属すということも一つ一つ検討して決めることができるということだ。修辭法のうち、意図的にある分類から別の分類に転用するものが転類表現である。転類には状況から判別できるものと、習慣的に判別できるものがある。

例えば、『莊子』秋水篇には以下のようにある。

(恵子が梁の国の宰相であったとき、莊子は訪ねて行って彼に会おうとした。ところが、ある人が恵子にむかって、「莊子がやってくるが、あなたに代わって宰相になろうとしているのです。」と話した。そこで、恵子は恐れて、三日三晩ものあいだ、都じゅうくまなく莊子をさがし求めさせた。／莊子は〔そのことを知ったので、〕いよいよ訪ねて行って恵子に会ったと

きにこう言った。「南方に鳥がいて、その名は鵙鵙<sup>えんすう</sup>という。君はそれを知っているかい。そもそもこの鵙鵙<sup>えんすう</sup>は、南の海から飛びたつて北の海へと飛んでいくのだが、梧桐<sup>あおきり</sup>の木でなければとまらないし、楝<sup>あふら</sup>の実でなければ食わないし、甘露<sup>くさ</sup>の泉でなければ飲まないのだ。ところが、ここに腐った鼠<sup>ねずみ</sup>をせしめた鳶<sup>とび</sup>がいて、鵙鵙<sup>えんすう</sup>が通りすぎると〔鼠を盗られないかと恐れて〕上を仰いでにらみつけ、「嚇！」とおどしつけたということだ。ところで、君も自分のせしめた梁国の地位〔を盗られないかと心配して。そ〕のためにこの僕を嚇するつもりかね。〕

ここの最初の「嚇！」は感嘆詞で、二つ目の「嚇する」は動詞であるが、二つ目の「嚇」は最初の「嚇」から引き出されてきたもので、この二つ目の「嚇」が転類表現の一つである。

また、『史記』高祖本紀にも以下のようにある。

高祖は亭長になると、竹の皮で冠<sup>かんむり</sup>を作ろうと、求盜(亭卒。亭には亭長の下に亭父と求盜の兩卒があり、亭父は亭門の開閉掃除を司り、求盜は盜賊を捕えることを司った)を薛(山東・滕県)の冠作りのところへやっつけてくらせ、いつもこれを冠<sup>かぶ</sup>っていた。貴くなってからも、いつもかぶっていたが、これが世にいわれる劉氏冠である。

ここの最初の「冠」は名詞で、二つ目の「冠」は動詞であるが、二つ目の「冠」は最初の「冠」から引き出されてきたもので、これも転類辞である。

さらに、『論語』公冶長篇の「斯<sup>いづく</sup>れ焉くにか斯<sup>いづく</sup>れを取らん(この人もどこから徳を得られたろう)」の句の朱熹注に以下のようにある。

上の「斯<sup>これ</sup>」の字はその人を斯<sup>これと</sup>し、下の「斯<sup>これと</sup>」の字はその徳を斯<sup>これと</sup>している。

ここの最初と三つ目の「斯」は代詞であり、二つ目と四つ目の「斯」は動詞であるが、二つ目・四つ目の「斯」もまた最初と三つ目の「斯」から引き出されてきたもので、これもまた転類辞である。

さらにまた『孟子』告子篇には以下のようにある。

彼は白く而して我これを白<sup>しろ</sup>す：彼が色白であり、自分がその色白を好ましく思う。

ここの二つ目の「白」も最初の「白」から引き出されてきたもので、最初の「白」は形容詞、二つ目の「白」は動詞である。動詞として使われるこの「白」もまた一つの転類辞である。こういった関連させて一緒に用いる転類は単語使用の状況から判定することができるものである。

このほか、状況からは判定できないが、単語使用の習慣から転類だと判定できるものも多い。ここにはいくつ

<sup>\*15</sup>『現代漢語詞典』第7版(商務印書館2016)では、12の大類に分けている。増えたのは擬音詞、數詞、量詞の三類。

かの例を下に挙げておく。

たとえば『左伝』定公十年にこうある。

公若の言うに「おまえは我を呉王んと欲するか」と。

「呉王我」の意味は、「私をあの呉王のようにする」ということで、名詞を動詞に転じて用いている。

例えば『史記』遊俠列伝には以下のようにある。

(楚)の田仲は義侠で知られており、剣が好きで、朱家を父事えていたが、自分では行いは十分ではないと思っていた。

「朱家を父事える」というのは、父親のように朱家に仕えるということで、名詞を副詞に転用している。

また韓愈「原道」には次のようにある。

その人(僧や道士)を人とし(還俗させ)、その書(仏典など)を火け、その住まい(寺院や道観)を廬にする(民家)。

点をつけた「人」「火」「廬」は習慣的には名詞として用いているが、ここでは動詞として用いている。これらもみな転類辞である。

さらにまた『史記』貨殖列伝には以下のようにある。

それゆえ齊の国は天下の人々の冠り・帯り・衣り・履り、すべてをまかなうようになって、東海から岱山までの諸侯はつつしんで[齊の]宮廷へ敬意を表しにやってくるようになったのである。

点をつけた「冠」「帯」「衣」「履」なども習慣的には名詞として用いられるが、ここでは動詞として用いられている。これらもまた転類辞である。

こういった転類辞が適切に運用されれば、語辞を簡潔で生き生きしたものにして(当然用い方が適切でなければ語辞は生硬で分かりにくくなる)、語辞に対してある種の特殊な興味を読む者に抱かせることができる。

例えば、『太平広記』二百四十五に『啓顔録』が以下のように引いてある。

晋の人王戎の妻は、王戎を「卿」と呼んでいた。王戎は妻に言った。「妻が夫を『卿』と呼んでいるのか。」妻は答えた。「私は『卿』を好きで『卿』を愛していますので、『卿』を卿いなのです。もし私が『卿』を卿なければ、誰が『卿』を卿ぶでしょうか。」

ここの三つの「卿を卿す」のうち、前の「卿」はいずれも代詞であり、後の「卿」はすべて転類した動詞である\*16。使い方もきわめて普通だが、リズムカルに用いられているので非常に生き生きとした感じを受ける。そのため親しみをこめた呼び方として長く伝えられるに

至った。それゆえに転類表現という方法は昔から注目されており、無理に用いられる場合すらあった。たとえば明の張岱が著した『陶庵夢憶』には、どれほど多くの場所にこの修辞法が無理に用いられているかわからないほどだ。

この転類の用法は、ずっと「実字虚用、虚字実用(実詞を虚詞として用い、虚詞を実詞として用いる)」と呼ばれてきた。時には「虚実」とも略称される。いわゆる「虚実」あるいは「実字虚用、虚字実用」はずっと名詞と動詞の転類にすぎなかった。良く引かれる例としては、「春の風が人にやさしく風き、夏の雨が人に雨す」(『説苑』貴徳)があるが、これは前の「風」と「雨」がいわゆる実詞で、後ろの「風」と「雨」がいわゆる「実字虚用」である。また、「(ご自分の)衣服をぬいでわしに衣せ、(ご自分の)食を勧めてわしに食させてくださった。」(『史記』淮陰侯伝)の、前の「衣」と「食」がいわゆる実詞で、後の「衣」と「食」がいわゆる「実字虚用」である。またさらに、「歩」を「行」と解釈するのは、すなわちいわゆる「虚字」であり、「歩」を度量衡の名称に用いて、「一步を六尺とする」(『史記』秦始皇本紀)というのは、「歩」のいわゆる虚字実用である。また、「覆」を「敗る」と解釈するのは、いわゆる「虚字」である。「覆」を兵の名詞として、「君(わがきみ)は三覆を設けて待機されよ」(『左伝』隠公九年)と言って、それを設けて相手を負かすための伏兵を「覆」と呼ぶのは、いわゆる虚字実用である。以上に挙げたいわゆる実字虚用、虚字実用はいずれも名詞を実詞、動詞を虚詞と呼んでいる。いわゆる実字虚用、虚字実用とは、名詞を動詞として用いるか、動詞を名詞として用いるかであって、いずれも名詞と動詞の転類なのである。実際には転類は名詞と動詞のみ限られてはいない。また転類は文言文にのみ使えるのではなく、白話文や口語体においても使うことができる。以下に例を挙げる。

ですから、晋代の肖像画や、あるいは当時の文章を見て、だぶだぶのものを衣服し、鞋ずに履きでいるので、さぞ気持がいいだろう、さぞ気楽なものだろうと思うのですが、その実、彼らは内心はとてもつらい思いをしていたのです。(魯迅「魏晋の気風および文章と薬および酒の関係」)

老栓、おめえ、運氣たんだ。(魯迅「薬」)

胡国光は一声「哼」た。(茅盾「蝕」動揺)

このいくつかの例文の中の「鞋」「履」「哼」などの語もまた転類詞である。白話文や口語における転類は、単純に転用できず、常用の配合要素を転用する語に添えねば

\*16 卿：中国語は動詞の後に目的語を置くVO構文を作る。従って卿(動詞) + 卿(目的語)という説明がなされると、前の卿が動詞、後の卿が代詞(目的語)となる。日本語は、目的語・動詞の順になるので、訳では前・後の話を取り替えている。以下実字虚用の場合もこれに従う。

ならない場合もある。例えば、「看（見る）」「想（思う）」などの動詞を名詞に転じようとするなら、名詞によく付けられる「頭」などの語を連用して、「看頭」「想頭」などとしなければならない。あるいは、「車」「袋」などの名詞を動詞に転じようとするばあいにも、動詞によく連用される「起」「開」「着」「了」などの語を加えて、「車起」「車開」「袋着」「袋了」などとする必要がある。

## 十一 回文

回文、過去にはしばしば廻文とも書いたもので、言葉の順序に注意して往還往復の面白みを出そうとする修辭法である。『詩苑』類格に唐の上官儀の「詩に八対あり」という言葉を載せている。その「七は回文対という。情感が新しく生まれるので言いたい事が生まれ、言いたい事が生まれれば情感もまた新しくなる、というのがこれである。」このような回文はいわゆる「文学革命から革命文学に到る」というものに他ならず、言葉の順序を内容の特徴に従って適切に往還往復させてみたものにすぎない。散文の中では、よく見かけるものである。しかも、その出現はかなり早い。『老子』の書の中だけでも、かなりの例がある。

「善人は不善人の師、不善人は善人の参考」（二十七章）  
 「知者は不言、言者は不知」（五十六章）  
 「信言は不美、美言は不信。」（八十一章）  
 「善者は不辯、辯者は不善。」（同上）  
 「知者は不博、博者は不知。」（同上）

その後物好きな人が、言葉の順序に全く拘束されず、上から下に読んでも、下から上に読んでも文として成立させようとした。こうやって奇妙な文体ができあがったのである。この奇妙な文体は、まとめて回文体と呼ばれる。詩・詞・曲のジャンルで共に作られたことがあった。詩では回文詩と呼ばれ、詞では回文詞と呼ばれ、曲では回文曲と呼ばれた。例えば『王臨川集』の中には、回文詩が幾首もある。

例えば「碧燕」の詩

碧燕平野眩、 黄菊晚春深  
 碧燕 平野に眩く 黄菊 晩春深し  
 客倦留甘飲 身閑累苦吟  
 客倦み 甘飲を留め 身は閑にして苦吟を累す  
 参考\*17：吟苦累閑身 飲甘留倦客  
 （吟に苦しむ閑を累する身 飲むもの甘し倦を留むる客）  
 深春晚菊黄 眩野平燕碧  
 （深き春に晩菊は黄に 眩野平らにして燕

は碧たり）

例えば「夢長」の詩

夢長随永漏 吟苦雜疏鐘  
 夢長く 永漏に随う 吟に苦しみ疏鐘雜じる  
 動蓋荷風勁 沾裳菊露濃  
 蓋を動かす荷の風勁よく 裳を沾す菊の露は濃し  
 参考：濃露菊裳沾 勁風荷蓋動  
 （濃露に菊の裳沾い、勁風に荷の蓋動く）  
 鐘疏雜苦吟 漏永隨長夢  
 （鐘疏にして苦吟に雜じり 漏永くして長き夢に随う）

例えば「迸月」の詩

迸月川魚躍 開雲嶺鳥翻  
 月を迸らせ川魚躍ね 雲を開いて嶺鳥翻る  
 徑斜荒草惡 台廢冶花繁  
 徑斜めにして荒草悪しく 台廢されて冶花繁し  
 参考：繁花冶廢台 惡草荒斜徑  
 （繁花 廢台に治し 惡草 斜徑を荒らす）  
 翻鳥嶺雲開 躍魚川月迸  
 （翻鳥 嶺雲は開き 躍魚 川月は 迸る）

例えば「泊雁」の詩

泊雁鳴深渚 収霞落晚川  
 泊雁 深き渚に鳴き 収霞 晩川に落ちる  
 柝随風斂陣 樓映月低弦  
 柝に随い 風 陣に斂り 樓 映えて月低く弦  
 漠漠汀帆轉 幽幽岸火然  
 漠漠たり汀に帆は轉じ 幽幽たり岸に火の然ゆ  
 壑危通細路 溝曲繞平田  
 壑は危く細路を通じ 溝は曲がり平田を繞る  
 参考：田平繞曲溝 路細通危壑  
 （田は平らにして曲溝を繞らせ 路細くして危壑に通ず）  
 然火岸幽幽 轉帆汀漠漠  
 （然火に岸は幽幽 帆を轉ずれば汀は漠漠たり）  
 弦低月映樓 陣斂風隨柝  
 （弦低の月は樓に映え 陣斂の風は柝に随う）  
 川晚落霞収 渚深鳴雁泊  
 （川晩れて落霞収まり 渚深くして 鳴雁泊まる）

以上の回文詩は、往還往復しても、共に朗誦して読めるものなのである。

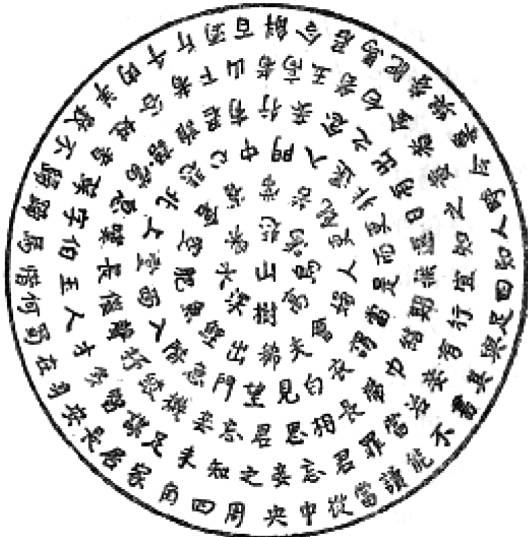
『文心雕龍』明詩篇では、「回文の興りは、道原がその始めである」というけれども、道原が何という姓で、いつの時代の人か、全く調べようもなく、たぶん劉勰の説は正しいもとは限らない（趙翼『陔余叢考』二十三を参照）、清代の朱存孝の説の确实で要を得たもの方には及

\*17 原文には回文化されたものは挙げられていないが、念のため参考として逆から読む例も挙げておく。以下同様に参考として示す。



ばないようだ。存孝は言う。

詩の形式はあれこれあるが、回文がもっともユニークなものだ。蘇伯玉の妻の「盤中詩」がその初めて、竇滔の妻「璇璣図」でほぼ完成された(「回文類聚序」\*18)。



(盤中詩)



(璇璣図)

そもそもこれは何人かの奥様方によって作られた詩体なのであった。作った原因は概ね同じで、亭主とずいぶん長い間離れているので、亭主のことを思って、こんな代物を作り亭主に送って読ませたのである。蘇伯玉の夫人については、彼女が何という姓で何という名なのか分からないし、彼女が漢代の人かどうか分からない。分

かるのは「盤中詩」の物語が「伯玉が蜀に使いに出されて、長い間帰ってこなかった。その妻は長安におり、彼を思慕して、この詩を作った」ものであるということだけだ。「盤中詩」は以下のように詠じる。

山樹高	鳥鳴悲	山は樹高く	鳥鳴くこと悲し
泉水深	鯉魚肥	泉は水深く	鯉魚は肥ゆ
空倉雀	常苦飢	空倉の雀は	常に飢えに苦しみ
吏人婦	会夫稀	吏人の婦は	夫に会うこと稀なり
出門望	見白衣	門を出でて望めば	白衣を見ゆ
謂当是	而更非	謂えらくはまさに是なりと	しかれども更に非なり
還入門	中心悲	還りて門に入れば	中心悲し
北上堂	西入階	北に堂に上り	西に階に入る
急機絞	杼声催	機を急ぎて絞ばれ	杼声に催さる
長嘆息	当語誰	長嘆息するも	当に誰に語る
君有行	妾念之	君に行くあり	妾之を念う
出有日	還無期	出るに日あり	還るに期なし
結巾帶	長相思	巾帯を結び	長く相思う
君忘妾	未(一作天)知之	君の妾を忘れたるかは	未だこれを知らず

妾忘君	罪当治	妾の君を忘るれば	罪は当に治すべし
妾有行	宜知之	妾に行くあり	宜しく之を知らん
黄金金	白者玉	黄なるものは金	白なるものは玉
高者山	下者谷	高きものは山	下きものは谷
姓者(一作為)	蘇	字伯玉	姓は蘇 字は伯玉
(一有作字)	人太多	智謀足	人は才多く 智謀は足る
家居長安身在蜀		長安に家居するも	身は蜀に在り
何惜馬蹄歸不數		何ぞ惜しまん馬蹄歸すに	数あらずとは
羊肉千斤酒百斛		羊肉千斤 酒百斛	
令君馬肥麥與粟		令君の馬は肥ゆ	麥と粟
今時人、知四(一作不)足		今時の人、四足を	知す
與其書、不能讀		その書を與うに	読む能わざれば
當從中央周四角。		當に中央從り四角を	周るべし

「盤中詩」の「中央從り四角を周る」という配列は図表の通り。伝えでは、伯玉が蜀に使いして、長く家に帰ってこないの、夫人がこの詩を盤の中に書いて彼に送ったらしい、従って「盤中詩」と呼ぶのである。詩の書き方は、図のように、曲がりくねってできており、中央から四隅を回っていて、あれこれ思い巡らせる気持ちを示

\*18 回文類従：宋の桑世昌編。康熙年間蘇州の朱存孝が補遺を作った。なお『文心雕龍』に言う道原は道慶の間違いで、劉宋の賀道慶を指すという説もある。

している。伯玉はこれを見て以後、はっと悟って帰ってきたという話である。

しかし、「盤中詩」は実のところ正式な回文ではない。なぜならば逆からは読めないからだ。しかし、言葉の配列上の工夫は、その後の回文と些か似たところもあって、回文の先導、すなわち「その初め」だと言ってかまうまい。回文で最も有名なのは竇滔夫人の「璇璣図」である。夫人は蘇という姓、蕙という名、若蘭という字である。作った回文詩は 八百四十一字で、縦横各二十九字の方形となっていて、往還反復して読めば三千七百五十二首の詩ができあがる。その物語は「盤中詩」とよく似ている。『晋書』列女伝にいうところに依れば、「竇滔は流沙に流されたので、蘇氏は彼を慕って、錦に「回文璇璣図詩」を織り込み、竇滔に贈った。さまざまな順序でこれを読むと、その言葉は大変痛ましかった」という。唐の武則天の序によれば、家庭のいさかいによって、竇滔は蘇氏と音信を断つた。蘇氏は後悔し嘆き、錦を織って回文を作った。五色の彩りが敷き述べられ、目にも鮮やかで、縦から読んでも横から読んでも逆から読んでも、ちゃんとした詩文としてあり、「璇璣図」と名前をつけ、襄陽まで届けさせた。この時竇滔は襄陽を守っていたので、これを読むと、非常に感動し、すぐさま蘇氏を任地へ迎えたのだという。以上の二説の説く事柄はまったく同じというわけではなく、いったいどちらが正しいのかわからないが、通常は後者の説のほうが概ね信じられている。いま、図の中の一首の例を下に挙げる。

仁智懷徳聖虞唐	仁智 懷徳 聖なる虞唐
貞志篤終誓穹蒼	貞志 篤終 穹蒼に誓う
欽所感想妄淫荒	感じ想う所淫荒をみだりにす

↙るを欽しむ

心憂増慕懷慘傷 心は憂く増々す慕いて懷は慘傷す

傷慘懷慕増優心 傷慘として慕うを懐い 憂心増す  
荒淫妄想感所欽 荒淫妄想は感の欽しむところ

蒼穹誓終篤志貞 蒼穹に終わるまで篤志の貞しきを誓い

唐虞聖徳懷智仁 唐虞の聖徳 智仁を懐え

蘇蕙の「璇璣図」は回文の中では奇想天外の作というべきであって、『鏡花縁』四十一回ではこれを「奇図」と題しているけれども、その内容は形式に拘束されていて、まさに「ガチガチに縛り付けられた」姿であることも明かである。奇想天外な回文ではあるが、実はなんら立派なものではない。しかし、それは漢語文の可能性—語順を考えるうえでおもしろい試みでもあり、そのできえがどうなるかについては、イタリア未来派の自由語運動<sup>\*19</sup>に似たところもあって、我々には大変良い参考になるだろう。

回文は各種語順上の工夫の他に、墨色を応用したり字形の離合の応用もしている。しかし、概ね語順の応用を離れることはない。語順の応用から離れば、それはまた別の文体である。以前所謂「心意を図であらわし、人をして自ずから悟らしめる」という「神智体」もまた回文体だと混同した者もいた（『回文類聚』卷三）。しかし、神智体とは字形の大小、筆画の数、位置の正逆、配列の粗密などを利用するもので、語順を利用するものではないので、実は回文とは異なるのである。宋の蘇軾には神智体の「晚眺」という一首があった。詩は次のようである。↙

（長亭短景無人画、老大横拖瘦竹筇、回首断雲斜日暮、曲江倒蘸側山峰）

（『東坡問答録』による）

↘彼はこれを書いて以下のように人を困らせたそうである。

神宗熙寧年間に、北朝から使いが来ると、その使いはいつも詩作を自慢して、翰林の学者たちを困らせた。皇帝が蘇東坡に命じて宿舎の世話をさせたところ、北の使者はやはり詩で蘇東坡を困らせた。蘇東坡は「詩を詠じるのは、簡単なことですが、詩を鑑賞するとなるとなかなか難しいのです」というと、「晚眺」の詩を見せた。北の使者は慌てて後悔した

が何とも応えられず、それ以後もう詩を語らなくなってしまった。（『回文類聚』卷三）

このような神智体の詩は、今でも民間にはまだ伝わっているし、しかも人を困惑させる性質を持っている。

（以下続稿）

<sup>\*19</sup> 20世紀初頭にイタリアに現れた過激な芸術運動。

## 参考文献

引用文の訳文については以下の書籍を参考にした。

『莊子』(外篇)、『紅樓夢』『論語』『春秋左氏伝』『史記列伝』岩波文庫、岩波書店。

『史記 I 本紀』ちくま学芸文庫、筑摩書店。

『論語集注 2』東洋文庫、平凡社。『孟子』講談社学術文庫、講談社。

『春秋左氏伝』『史記』『水滸伝』中国文学全集、平凡社。

『儒林外史』『説苑』『礼記』『国語』『史記』『孟子』中国古典文学大系、平凡社。

## 付録

### 霍四通「節縮等六種類の『言葉上の修辞技法』の当代における研究の進展」<sup>20</sup>

『修辞学発凡』第七篇では十一種の所謂「言葉上」の辞格が語られている。ここでは現代における後半の六種の利用法と研究についての基本的な状況を紹介する。それぞれ

六、節縮 七、省略 八、警策 九、折繞 十、転品<sup>\*21</sup> 十一、回文である。

## 六 節縮について

『修辞学発凡』は「縮合」と「節短」の二種に分けている。「節短」のほうは、「通常は慌てて言った結果」で、多くの場合「誤用」のように見える。例えば、「呷嚙」という疊韻の語だが、その意味は①荒々しいさま、②言うことを聞かないさま(『漢語大辞典』)で、「徜徉」「徘徊」などのように二字の中の一字を別々に使うことはできない。従って「節縮」は修辞法ではないのではと疑問を示す者もいる(張濤、2008)。しかし、ここで言う「節縮」は「飛白」同様に交わされる会話をそのまま描くものであり、修辞活動の一つなのである。押韻効果や、発話の経済性、とりわけユーモアを効かせようとするときに、意図的に節縮するような場合は、積極修辞の一つとなる。

銭鍾書(1958:13-14)が文学における「節縮」用法の源流を語っている。彼は、「この修辞は唐人の類書『初学記』が煽ったが(原注:……『初学記』は魏の武帝曹操が作った「烏鵲南飛」の句を「魏鵲」と縮めてしまった)、李商隠のまねからくる流弊のほうが大きい(原注:例えば李商隠「喜雪」の「曹衣」、「自桂林奉使江陵途中感懷」の「楚醪」など<sup>\*22</sup>)」と考える。

言語学の節縮にたいする状況は主に縮略語の研究上に集中する。李熙宋、孫蓮芬編(1986)では現代漢語中に縮略のできる言葉を「略語」と呼び、その作られ方の違いで、四類二十種に分けている。そこには15000あまりの項目がある。馬慶株(1987)は縮略という新語作成方法のもつ極めて高い生産性を示し、縮略の語法効能にかなり深い分析を加えている。グローバル化の進展によって、現代の縮略語研究もピンインを使った縮略語に注意するようになって来た。インターネット言語を研究した論著はみな、拼音文字のイニシャルによって作られる縮略語の例を挙げている。例えば MM(meimei、インターネット上で男性が女性に対する褒め言葉、美人のこと)、DD(didi 弟)、GG(gege 兄)、PP(piaopiao 漂漂、美しいこと)等である。

池昌海、鍾舟海(2004)が一類として挙げた「託形法」はやはり一つの縮略である。例えば「白骨精」(「ホワイトカラー、骨幹幹部、精鋭」のふざけた呼び方)、「無知少女」(無党派 知識人 少数民族 女性をまとめた言葉で、四つの特徴のある特殊な団体をさす)などである。この縮略語はその語の通常の意味とはかなり違うものだが、使用の実際ではユーモアの効果を生み出すものである。

## 七 省略について

『修辞学発凡』では省略を「積極的省略」と「消極的省略」に分ける。前者はおもに「省文」を指し、後者は「文ではなくて言葉を省略するもの」である。

「積極的省略」は、『発凡』の挙げる「麗妃太子申生を譖る」の例に依ると、文章学、作文学における詳細な描写と簡略の描写に属させるべきもののようで、『左伝』とその他の史書での同一事情の詳細・簡略異なる表現を比較しているので、比較修辞研究と見なして良いようだ。しかし、表現法自身はやはり消極的修辞と見なすべきほうが妥当であろう。なぜなら、これらの書籍自身は「記述の領域」に属するものであり、「表現の領域」に属するものではないからである。

「消極的省略」は更に「上文を受けての省略」と「下文によって分ける省略」の二種に分けられる。この二種の省略の「消極的省略」は、現在では語法および語用現象と見なされていて、一つの辞格としては扱わなくなった。「語法上、しかるべき完全な語法結合に照らして、ある語法成文が欠けていれば、それは省略である。語用上、通常、ある文句を文脈から切り離しても、意味がはっ

<sup>20</sup> 原注:本文の研究は受中国教育部人文社会科学研究规划基金项目“修辞学视角的汉语违实表达研究”(批准号:16YJA740015)の援助を受けたものである。

<sup>21</sup> 訳注:転品は転品詞のこと、修辞学発凡では「転類」としている。

<sup>22</sup> 訳注:曹衣は『詩経』曹風の蜉蝣の中にある「麻衣如雪」を略したもの。楚醪は、楚と晋が戦った時、楚王が罎に入れた醪を川に投げた話に基づくもの。



きりとわかり、きちんと伝わるようにするとき、そこに必要な補填しかもそれだけが補填可能な語法成分或いは言葉が、つまり省略されている言葉だ、と考えられている。」（譚学純等編、2010:208）この意味からすると、『発凡』が論じている二種の言葉を省略する省略に言語における省略現象を含むことは全くできない。黄民裕(1984)は省略を七種に分け、承前省、蒙後省、対話省、突顯省、潜詞省、自述省、泛指省としていて、其の中の対話省は、以下のようなものである。

- (1) 「日々の飲食はいつも通りでしょうか」と言うと、  
「お粥に頼っています」と言った。

このように対話の文脈であれば言わなくても自明な成分を省略するものだ。これについては『発凡』の中では明確には指摘されていない。よく見られる語用上の省略なのであるけれども。

であれば、積極的修辭現象となる省略はあるのだろうか。当然ある。賈平凹の「廢都」の早期版本の中には、「このところ××字を削る」という書き方がたくさんある。これが積極的修辭の省略であって、読者に省略された事物をあれこれと想像させるのである。趙本山の短編「隣の君」の台詞には、「僕は彼女に一言言いたかった、ここで三字を省略する」「私は二人で学校からの帰り道で、小さな林をとおり抜ける夢を見た、ここで二十七字の省略」などがある。このほかに、血なまぐさい情景の省略については、書かないあるいは抑えて書くことはそのまま書くよりも効果的なものである。

鄒光椿(1992)は『紅樓夢』（乾隆抄本百二十回紅樓夢稿本）九十八回で林黛玉の臨終前をえがくところ、「宝宝玉玉你好说到好字便浑身冷汗不做声了」の標点問題に基づき、「省略」と「跳脱」の区別問題を語っていた。譚学純等(2010:210)は修辭上の省略と、文章法の省略、語法上の省略、語用上の省略を区別すべきだと主張している。

## 八 警策について

『発凡』は警策を三種に分けている。しかし、当代の多くの学者は「警策」自身は決まった言語形式はなく、修辭技法とは見なせないと考えている。とはいえ、警策は主に語義レベルでの非通常性を利用して人々の注意を引きつつそこで伝えようとする意味を考えさせるものだ。この分類に問題はない。

陳望道が「警策」のなかで第一に挙げた例「事實は事實」は、よく言われる同語である。張弓『現代語修辭学』では現在人々が用いている「同語」の名称を正式に挙げて、一つの独立した修辭法としている。彼は形式上同語を二種類に分け、「真理は真理」という単独形式が一類、「あなたはあなた、私は私」という対語形式を別の一類とした（張弓、1963:179）。

近年来、同語を描写し分析した論著が幾つか発表された。呂叔湘編の『現代漢語八百詞』では「『是』前後に同じ言葉を用いるもの」の一節の中で、さらに同語を六種類に分けている（1980:438）。邵敬敏(1986)は呂叔湘の判断文の作用に関する論述の基礎の上に、同語形式の修辭特徴について検討している。他に新しい理論を用いて同語現象を描き解説しようとした論文もある。例えば劉徳周(2001)『同語修辭格與典型特徵』では認知の視角から同語を研究している。林書武(1994)、彭增安、張少雲(1997)では、おもに語用の視角から同語を研究している。徐烈炯、劉丹青(1998:142-157)の普通話と上海語のなかの「コピー式話題」に対する議論は注意すべきである。そこに扱われる項目の多くは同語と関わっているからだ。

『発凡』が挙げる「警策」の三種の類別は現在でもともに大きな生産性を持つ。数年前流行した「ある××と呼ばれる××」形式のうち、少なからぬものが第三種の「奇説」類の警策である。例えば「撤退という勝利もあれば、占領とよばれる失敗もある」というものである（2010年春節晚会相声）。

## 九 折繞について

現在では折繞は多くが婉曲の範疇の中にまとめている。

しかし、折繞と婉曲はやはり違うようだ。当然、両者は共に直接本意を伝えるものではない。しかしながら、折繞は直接で明快な表現をとらずに、あれこれぐるぐる回るように言うだけで、言葉の意味と意図は逆にはっきりして、言葉の意味はよく分かるようになり、さらにユーモアの雰囲気であらわし、言語の表現力を強めるのである。『史記』廉頗藺相如列伝に「廉將軍は年老いたとはいえ、食欲はいまだに旺盛だった。そこで、臣下と共にいるとしばらくの間に何度も大便に立つことになった」とある。ここは裏では遠回しに人物を貶めている所だが、表現はあらっぼく、婉曲にしようという気持ちはない。

一方婉曲（婉轉）の方は主観的な礼儀に基づいたお願いであり、引き合いに出される事柄に託したり、暗示等の方法で本当に言いたいことを伝えようとするもので、穏やかで、波風を避けるものである。例えば、「どうか、ドアを閉めるのを手伝っていただけませんか」などのように、疑問形を使って、そのお願いしている「ドアを閉める」という内容を伝えようとするが、当然ながら穏やかで礼儀正しさが強いものになる。

2013年春節晚会のコント「跳ねなければ跳ねよ」の中で、潘長江が演じた小独楽が、この場所は俺の縄張りで俺がボスだ、と言うと、蔡明がすぐさま、「お前の縄張りだと？お前はこの電柱の下に目印をつけたのか」と

言った。ここでは遠回しにお前は犬だと罵ったのである。2012年の春節晩会では、馮汎、牛莉らが演じた漫才「愛の代車」の中で、牛莉は「この二つの眼は、誠に顔の中で占める場所が少なく、原初のままだ」と言ったが、これはその人の目が小さいことを言っているのである。

## 十 転品について

単語の「活用」「変性」「転類」時には「兼用」も含むが、これらは語法学と修辞学では長年来共に興味が持たれてきた現象である。沈家煊(2010)の観察によれば、動詞を名詞として用いるよりも、名詞を動詞として用いる方が特殊な現象で、修辞的な現象である。名詞を動詞として用いるのは、新作から定型に到るまで、一系統ではあっても、新作と定型は修辞と語法に区分されるべきである。方梅(2011)もまた修辞の転類と語法の転類を二つの概念に分けている。修辞の転類が語法上の新しさを作ると、それは特定の時期の語用形式となる。歴史的な視角から見ると、修辞の転類には異なる方向に進む可能性がある。文型のモデルとして最終的に落ち着く語用モデルはどれか、単語構成モデルとなるのはどれか、それは、文化的要素を含む多くの要素が関係している。

認知言語学では転類は転喩の一種だと考えている。Kövecses & Radden (1998: 39) は、転喩の多くは、行為者で行為に代え、工具で行為に代え、結果で行為に代え、感知物で感知に代え、感知で感知物に代え、制御者で被制御者に代え、被制御者で制御者に代え、行為物で行為に代え、行為で行為物に代え、時間で行為に代え、また結果で行為に代えるなどで、これらは転類に関わるだろうからである。例えば、「to author a book (本に作者すること)」の「本」からすると「作者」は、行為者を行為に代える転喩である。「to shampoo one's hair (髪を洗髪剤を洗髪する)」の中では、「頭髮」からすると「洗髪剤」は道具を以て行為とする転喩である。転喩が単語品詞の範疇化を導くと、それは転類になる。例えば、

(2) He hammered the nail into the wall.

転喩によって名詞の「金槌」を動詞に代えて、「金槌で釘を壁に打ち込むと言う行為」を伝えようとしている。「金槌」の品詞に転換があり、語法上の転喩となっているのである。名詞から動詞に品詞が転じる類型はおもに八種ある(辛斌、趙旻燕 2008)。時間が動作を示すものとして(DURATION FOR ACTION)は次の通り。“to summer in France, to vacation in Mexico, to honeymoon in Hawaii” この中の「夏す(避暑する)」「休暇す」「蜜月る」などは、名詞からきたものである。

## 十一 回文について

当代の修辞学では回環を回文の中から独立させている。回環とは、一つの単語或いは文の語順を逆にし、始終を逆にして別のフレーズや文を組み立てる修辞方式である。「『回環』と『回文』は異なる。回文というのは文字を単位とし、上から読んでも下から読んでも文になるものである。回環とは単語、フレーズあるいは文を単位とするものである。」(胡裕樹主編、1981 532-533) 回文とは「上海自来水来自海上(上海の水道は海辺から来る)」といった文字遊びで、創造性は低い。中には諧音を一緒に使うものもある。例えば「有錢男子漢、無錢漢子難<sup>\*23</sup>(難は男に同音、その意味は、金があれば立派な男ぶりを発揮できるが、金がないと男は辛いものだ)」(郭德綱『過得剛好』)

一方回環となると、二つの事柄の間の複雑な関係を示しうるので、強い生命力がある。循環する二つの文の言葉が完全に同じかどうかで、回環は二類に分かれる(譚学純等編、2010: 119) 第一類は「厳密な回環」で、循環する二文の言葉が完全に一致するものだ。例えば

(3) 發展的中国 需要 世界、世界 需要 發展的中国。

(發展する中国は世界を必要とし、世界は發展する中国を必要とする)

第二類は「緩やかな回環」である。循環する二句が、始めと終わりを除いて、その他の言葉に多少の違いがあるもの。例えば：

(4) 劉国梁和瓦尔德内尔你打過來，我擋回去，我擋回去，你再打過來，足足爭奪了十一个回合才决出勝負。劉国梁とワルドナーは、(卓球の試合で) 打ちまわると、打ち返し、打ち返すと、また打ち込こんで、なんと十一回目ようやく勝負がついた。

以上

## 参考文献：

- 池昌海、鍾舟海2004《“白骨精”与“无知少女”：托形格略析》，《修辞学习》第5期。
- 胡裕樹主編1981《現代漢語》(增訂本)，上海教育出版社。
- 黃民裕1984《辭格匯編》，湖南人民出版社。
- 李熙宗、孫蓮芬編1986《略語手冊》，知識出版社。
- 林書武1994《漢語“名詞是名詞”句》，《語用研究論集》，北京語言學院出版社。
- 劉德周2001《同語修辭格與典型特徵》，《中國語文》第4期。
- 呂叔湘1980《現代漢語八百詞》，商務印書館。
- 馬慶株1987《縮略語的性質、語法功能和運用》，《語言教

<sup>23</sup>男子漢、漢子難：ここでは「男子漢」と「漢子男」の部分が発音すると回文に聞こえるということ。

学与研究》第3期。

彭增安、张少云1997《同语格的语用修辞功能》，《修辞学习》第2期。

钱钟书1958《宋诗选注》，人民文学出版社。

邵敬敏1986《同语式探讨》，《语文研究》第1期。

谭学纯、濮侃、沈孟瓔主编2010《汉语修辞格大辞典》，上海辞书出版社。

辛斌、赵旻燕2008《名词转动词的认知语用分析》，《淮海工学院学报》（社会科学版）第1期。

徐烈炯、刘丹青1998《话题的结构与功能》，上海教育出

版社。

张弓1963《现代汉语修辞学》，天津人民出版社。

张涛2008《试论“节缩、警策”作为修辞格的不成立》，《沙洋师范高等专科学校学报》第2期。

邹光椿1992《“宝玉，宝玉，你好——”——略说“省略”与“跳脱”》，《修辞学习》第2期。

Kövecses, Zoltán, Günter Radden1998 Metonymy: Developing a cognitive linguistic view. *Cognitive Linguistics* 9: 37-77.